

Title	W・G・バーチエット著 山田坂仁・小川修訳 纏足を解いた中国
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.7 (1954. 7) ,p.768(66)- 770(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19540701-0066
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540701-0066">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540701-0066</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うに、マルクスのイデオロギーと労働価値法則は一つのやつかいな旅券であつて、旅行の眞實な目的のために有効な役割を果しているとは認めがたい。著者は最後に、ソヴェートの理論が近代理論とも古典的マルクス理論とも異なり、ソヴェートの現段階に即應してマルクス理論を改訂しつつ體系化することに獨創的な展開を示しつつあると結んでいる。(昭和廿七年十二月、A五判三一頁 三八〇圓 文京書院刊) (氣賀 氣三)

W・G・バーチェット著

山田坂仁・小川修譯

「纏足を解いた中國」

「中國、それは眠れる獅子である」。十九世紀初頭、西歐資本主義の影響がインドを通じて東洋に及ぼうとした當時、しばしば西歐の知識人の話題となつたのは中國についてであつた。かつてマルコ・ポーロによつて紹介されたこの神祕の大陸、底知れぬ深さをもち無限の資源を蔵しながらも、封建的な社會制度のもとに安逸の夢をむさぼる清國についてであつた。だが滿洲人の支配するこの國は、當時すでにその内部に幾多の矛盾をはらみ、いわゆる内憂外患ももたらつてその封建制度をゆるぶるようになつていた。この意味で一八四〇年のアヘン戦争は中國にとつては實に大事件であつた。毛澤東もこのべているように、中國の社會が封建的社會から半植民地的半封建的社會にかわりはじめたのはこのアヘン戦争からであつて、中國人民の苦悶はこの時から全く新たなものとなつたのである。それから十年、洪秀全による太平天國の亂はキリスト教的な色彩をおび、農民一揆的な性格をとどめてはいたけれども、とにかくそれは滿洲族の支配をくつがえし、イギリス資本と結ん

で次第に買辦化する封建勢力に抵抗した一大民族運動であつて、中國人民にも彼等の敵が外國資本とこれに結びつく封建的支配者であることがほゞわかりかけて來たのであつた。しかも外國の帝國主義勢力の前には、あまりにも無力で卑屈な支配者たちが、一度民衆の前に立つては威風凛々になることでは、われわれの祖國日本の支配者もかつての中國に劣らないが、とりわけ中國ではひどかつた。一九〇〇年の義和團事件は、このような賣國的な支配階級に對する中國民衆のはげしい怒りといきどおりの結果であつたのだ。かくしてついに一九一一年十月孫文による清朝の打倒、いわゆる辛亥革命がおこり、一九一二年中華民國が成立したのであるが、この革命はいわば實を結ばぬ「あだ花」と化する運命にあつたことは云うまでもない。なぜなら革命の主體となつたものは廣汎な大衆層と少數のインテリゲンチヤと民族資本家ではあつたが、しかし實權をにぎつてこの革命の成果を強引に自己の手中におさめたものこそ、ほかならぬ袁世凱を中心とする大軍閥、しかも帝國主義列強と結ぶ軍閥であつたからである。封建的な「きずな」をたちきつて自由な近國家を夢見た中國のインテリゲンチヤにとつてこれほどゆううつなことがあつたであろうか。だがそれだけではない。一九一五年、第一次大戦のどさくさにまぎれて、二十一條條の侵略的な要求をつきつけた帝國主義日本の態度は、かつて見ぬいきどおりをもつて迎へられたのであつて、このようにして一九一九年五月四日有名な五・四運動が勃發したのである。そしてあらゆる封建勢力と帝國主義勢力に反抗して立ち立つたこれらの青年たちの心のうちには、すでにロシア革命の影響をうけてマルクス主義が根強く芽生えつゝあつたことも忘れてはならない。ふたたび毛澤東の

言葉をかきりならは、「一九一九年は中國の民主主義革命が舊い民主主義革命から新しい民主主義革命に轉化した轉換點」であつた。そして五・四運動の影響がその歴史的な意味が學生やインテリはもろん労働者や一般大衆の間に理解されたとき、中國人民の任務は「内戦をなくし、軍閥をたおし、國內平和を確立すること、國際帝國主義の壓迫をくつがえし、中華民族の完全獨立を達成すること、中國を統一して、ほんとうの民主共和國にすること」を目標として一九二一年七月、上海において中國共産黨が成立したのである。だがその後一九二七年四月蔣介石の國民黨軍は、上海において革命の同盟者共産黨員を虐殺し、クーデターを行つてからは中國は益々反動化の方向をたどつた。魯迅の作品に見られる徹底したレアリズム、たとえようもないゆううつさ、弱者の悲哀は、半植民地中國の良心的なインテリの苦惱を、如實にそして教訓的に物語つてくれよう。

(1) 竹内好氏他、中國革命の思想、五八頁。

(2) 胡喬木、中國共産黨の三十年、邦譯一四頁。

さて大分前置きが長くなつたが、このように中國の歴史と社會に宿命的であるかのように見える封建的な「きずな」、いや日本をもふくめてアジア的といわれる地域に、あたかも網の目の如くに存在する封建遺制、進歩に反對し革命を反革命におしもどして孫文を憤死させ魯迅を絶望させたこのものは、一體何であるか。新しい中國は一體どのようにしてこれを克服しつゝあるか。バーチェットはこの點についてくわしくふれてゐる。

ウィルフレッド・バーチェットは、オーストラリア出身の新聞記者で、第二次世界大戦中は米英軍に従つて各地を轉々として「人民民主主義の國々」や「巨濟島」などを書いてゐるが、

書評及び紹介

とくに外人としていち早く原爆都市廣島をおとずれて、「ノー・モア・ピロシマ」を發した最初の人であることは餘りにも有名である。それにつけてもわれわれは、歐米人で中國問題について研究家が多いことを知つておどろかざるを得ない。「中國の赤い星」のエドガー・スノーやオーエン・ラティモアは云うに及ばず、ジャック・ベルデンや「中國の家族と社會」の著者として有名なオルガ・ラング女史、また「偉大な道——朱徳の生涯——」を書き残してロンドンで客死したアメリカのジャーナリスト、アグネス・スメドレー女史としてつねに中國民衆のよき理解者であり味方であつたパール・バック女史などは、われわれが深く頭を下げなければならぬ人々ではないだろうか。イギリスの經濟學を學び、フランス文學を語リドイツの哲學を論ずるわれわれは、偉大な隣國、中國について果してどれだけのことを知つてゐるであろうか。われわれは、將來はともかく今迄に、ひとりのスノーも、ひとりのラティモアも、いわんやひとりのスメドレーをももたなつたことを、アジア人として心から恥づかしがるものである。

ともあれバーチェットのこの書には新聞記者としての豊富な體驗と見聞にもとづいて、一九三二年の中日戦争から一九四九年十月の中華人民共和國の成立を経て、朝鮮戦争勃發前後にいたるまでの中國民衆の、革命の苦難と建設のよろこびとが、るゝとして書きつづらるゝ。アヘンに毒され、或は纏足で歩けなかつた中國人民が、どのようにして立ち上つたか。名もない田夫村娘が革命の實踐と行動とを通じていかに悩み苦しみを讀みつて新たな感激にひたることができたか。われわれはこれを讀むの苦惱と歡喜とは、實に中國だけのものではない、近代の民衆

識と非近代的な意識との混在が、われわれの現實の姿であるならば、中國革命の歴史はわれわれに何を教えるであろうか。(岩波新書上(一九三頁)下(二〇五頁)各百圓、一九五二年オーストラリア)  
(1) スメドレーの「偉大なる道—朱徳の生涯」は「世界」に連載されている。(飯田 鼎)

石渡貞雄著

「農業恐慌論」

「農産物価格論序説」においては「觀念的生産力説」をもつて日本における農産物価格形成の低さを特徴づけ、「林業地代論」においては林業資本の回轉の無類の長期性に着目して獨特の「林業地代法則」を展開する(これに對する批判は、拙稿「林業地代論の一考察」本誌四六卷三號、鶴嶋雪嶺氏「林業地代論の一考察」京大經濟論叢第七十二卷第六號をみよ)といつた具合に、農業經濟學上の未開拓の分野に、進んで開拓の斧をふるつてこられた石渡貞雄氏は、最近健筆とみに冴え、一九五二年の「林業地代論」以來、一九五三年「農業恐慌論」、一九五四年「農地改革の基本構造」と年々力作をものされていく。いづれも新見解を學界にとりたものであるが、ここにとり上げようとする「農業恐慌論」は、從來の農業恐慌理論の批判的検討の上に理論的體系を試みた野心的勞作で、わが國における體系的農業恐慌論のおそらくは最初のものである。氏によれば、「農業恐慌のこゝろの理解は、まず一般恐慌理論を正しく把握し、それが獨占資本結成によつてどう歪曲されるか、さらに資本主義の一般的危機のまたその激化の段階でどう歪曲さ

れてゆくかをまずみ、その上で農業恐慌が資本主義のいかなる段階にあらわれ、またあらわれねばならぬかをみ、そこで一般の恐慌理論との同一性と差別性を具體的な資本主義の段階での恐慌歪曲性とからみあわせて攝取することである(一三三頁)。  
かかる観点から、「第二章恐慌の理論的把握(一)」において「商品に統一されている矛盾」から説き起して、一般恐慌論を展開し、第三章においては獨占資本主義の段階における恐慌のあらわれ方の特徴を分析する、という準備的の手續をとつた後に、第四章から主題の農業恐慌論に入る。  
そこでは、まず「雑多な恐慌の種類」を整理し農業恐慌の範疇を定めることによつて「農業恐慌の基本的地位」が指定される。氏によれば、農業恐慌は「(1)、經濟の基礎部面(下部構造)としての生産局面での恐慌……であり、(2)、かつ農業としての生産部門の恐慌(一七九頁)」として把握される。そして、「農業恐慌理論にとつて必要な第一點は、舊來の農業恐慌理論の吟味自體である」(一八〇頁)となして、農業恐慌の「特殊性」を説く點において「今日まで完全に市民権をもつていた」ところの「農業恐慌に對する二人の權威ヴァルガとリヤシチェンコ」(一八二頁)が、理論的のみならず農業恐慌史的に吟味された後に、石渡氏独自の農業恐慌論が披瀝されるのである。  
氏の農業恐慌論の特徴は、嚴密な意味での農業恐慌と嚴密な意味でない農業恐慌(農業恐慌現象とを區別しようとするところにある。氏は曰ふ。「恐慌は生産の社會的性質(社會化)と領有の私的・資本家的様式との間の矛盾が、實現においてあらわれたものである。したがつて、恐慌は資本家的經營を前提とする。農業も又そうでなければならぬ。農業恐慌は、農業の不均等的な進歩性がようやく資本家的經營にまで發展し、資本家的經濟圏が支配的に農業をまで編入し擴大された下で、資本主

義的生産の社會化と領有の私的様式との間の經濟的矛盾が實現においてあらわれた、そこでの農業局面でしかない。換言すれば、農業も生産の社會化(社會的分業だけではない)をまつてはじめて農業恐慌となるのである。これが嚴密な意味での農業恐慌生起の基礎である」(二八四頁)。  
以上によつて明らかなく、石渡氏によれば嚴密な意味での農業恐慌は、農業における資本家的經營が支配的となつていくところでないければ決して起り得ないものである。従つて日本の農業のように資本家的經營が支配的でないところでは農業恐慌現象は起つても、嚴密な意味での農業恐慌は起り得ない。「農業は、この場合工業恐慌の波及としてだけであり轉化しただけとして恐慌現象をおこすにすぎない。なぜなら、農業が恐慌をおこす生産力と生産關係の矛盾自體をもつていないからである」(二八五頁)という。それ故に、このような見解からは、アメリカやイギリスのように農業それ自體に資本家的經營が支配的に存在しているところでないかぎり、農業恐慌は絶対に起り得ないということとなる。ところで、日本には農業恐慌が嘗てなかつたとか、あるいは決して起り得ないなどと言つたら、一笑に附されてしまふであらう。そこで石渡氏は、「農業恐慌は最初から世界農業恐慌であつた」と主張するのである。というのは、先の農業恐慌の規定からすれば一國民經濟の場合には後進國例へば日本には農業恐慌は起り得ないことになるが、世界農業というにすればそこには資本家的農業の支配的でない國の農業もインクルードされることになり、「アメリカ農業恐慌が直接恐慌を輸出するにすぎない」(一九四頁)と説明することによつて、資本家的農業の支配的でない國にも農業恐慌現象ではなく農業恐慌の生起することを論理づけることが一應

できるからである。だが、工業恐慌から波及した「農業恐慌」が農業自體に恐慌を生起せしめる要因がないということから、それを農業恐慌現象ではあつても農業恐慌ではないとする論理からすれば、アメリカの農業恐慌から波及して起る後進國の「農業恐慌」も、それが「波及したもの」であるかぎり後進國の農業自體に恐慌生起の基礎がないのであるから、アメリカにとつては農業恐慌であつても、資本家的農業が支配的になつていない後進國にとつては農業恐慌ではあり得ない筈ではなからうか? しかるに石渡氏は「農業恐慌は最初から世界農業恐慌であつた」と強調することによつて後進國にも嚴密な意味での農業恐慌の起りうることを論理づけようとするのである。曰く。「アメリカ經濟に集中的に醸成されている恐慌的矛盾が他の資本主義のそれをふくみつつ、資本主義經濟世界のアメリカ主導の再編成によつて、非常に歪曲され迂回されて恐慌をヨーロッパ諸國にひきおこすのである。農業恐慌において特に、それは強くあらわれている。一見するとその農業恐慌は……多くの場合ただ不當にある農産物が單なる小農國から輸入されて過剰化したものにすぎない如くみえる。即ち生産の社會化と領有の私的・資本家的様式との間の矛盾が、そこには見當らぬもののようにみえるであらう。その限り正しくは、農業恐慌現象ではあり得ないこととなる。果してそうか。否。そうみえるのは、局部的にみるからである。世界市場に對應しているアメリカ農業の持つ資本主義的矛盾が、決定的に小農國を支配している限り、又迂回的に歪曲して右の如き農業恐慌をおし出している限り、それは正しく農業恐慌である」(一九六頁)と。日本の農業恐慌についても、「これも一見すると東南アジアの非資本家的農民の米が、日本の食糧過剰をひきおこしただけのことと、正しい意味での農業恐慌ではない如くである。